

## 海外研修レポート

平成25年7月28日(日)

1)記録者：松本 賢一

2)訪問先：関西国際空港～仁川国際空港～モンゴル国際空港～バヤンゴルホテル

3)研修内容

●移動日

準備物確認や、阿波踊りの練習などを仁川国際空港での待ち時間でいった。

4)所感

いよいよ待ちに待った出発であった。8:30に前日から宿泊しているホテルのロビーでメンバーと待ち合わせをして、出発。関西国際空港で、スーツケースを預けるためにカウンターへ…。メンバーの中には、たくさんのお土産や研修をスムーズに行うためのアイテムやモンゴル研修への希望や期待を詰め込みすぎて、やや23キロの重量をオーバーしていた者もいたが、係員さんの「次からは気をつけてくださいね。」笑顔つきのアドバイスを受けることで、何とかチェックインを終え、仁川行きの航空機に乗り込んだ。お昼過ぎに出発し、スムーズなフライトでほぼ予定通りの12:10位に仁川空港に到着した。

仁川空港では、ほぼ6時間の待ち時間があり、そこで今回の研修メンバーでは初めてとなる『阿波踊り』の練習を行った。「初めて踊る。」というメンバーもいたものの、そこは今回の研修に参加するような積極的なメンバーのこと、すぐにコツをつかんで踊る事が出来た。しかし、いくら空港のロビーがすいているとは言っても、遠巻きに突然阿波踊りを踊り出す日本人の一向に、思わず笑い出している係員や、珍しそうに写真を撮っている観光客もいた。“旅の恥はかき捨て”とは、よく言ったものだ、と考えられずにはいられなかった。しかし、「研修の中で日本の文化を紹介する」という明確な目標を持って取り組めたので、練習や準備を通してメンバーの絆もできはじめたように感じた。その後、残った時間は仁川空港の中で各自、自由時間および食事の時間とした。

20:00位に仁川を飛び立ち、待ちに待ったモンゴル国際空港に23:00(現地時間)に降り立った。時差が1時間ありそのため時計だけ見ると3時間近くも飛んでいたように感じるが、実際は2時間弱のフライトである。モンゴル国際空港には傍嶋調整員がゲートのところで待機してくださっていた。優しい物腰であるが、それでいて芯がしっかりとした人物のようで、バスの中で最近のモンゴルや道路の状況や、バスが通過する建物について説明をしてくださったときには、心の中にあつた不安もなくなっていた。また、今回の研修で大変お世話になった現地通訳のオリギルさんと初めての出会いであった。流ちょうな日本語を話され、日本文化にも大変に精通されていたため、まるで自分たちよりも日本人のようであった。

バヤンゴルホテルに到着すると、オリギルさんの迅速な対応ですぐに各自の部屋に入ることが出来た。自分が泊まった部屋は、バスルームのコンセントがすべて使えないものの、きれいに掃除の行き届いた、古いけれども清潔な部屋で落ち着いて過ごすことが出来た。次の日からの研修に、期待と興奮でなかなか寝付けぬ夜だった。



仁川まで、エコノミークラス満席のため、ビジネスクラスに変更



仁川空港にて阿波踊りの練習



23:00ウランバートル空港着

平成25年7月29日(月)

1)記録者：松井 智恵

2)訪問先：JICAモンゴル事務所、在モンゴル日本大使館

3)研修内容

●JICAモンゴル事務所

日本のモンゴルへの支援の歴史やJICAの活動や支援の内容と今後の課題についての説明とモンゴルの教育事情と健康管理や安全上の注意点などについて伺った。

●在モンゴル日本大使館

林参事官よりモンゴルの経済成長の状況と今後の両国の関係について伺った。

4)所感

加藤俊伸所長から、これまでの日本との関係や支援の歴史・活動内容について話を伺った。モンゴルの経済成長は著しく発展をしている。GDPは、3,000ドル(1人)である。人口の30%にあたる人々が1日2ドル以下で生活している。失業したり、安い賃金で働いていたりしているようだ。社会主義から民主主義になったことにより、様々な課題もあるようだ。ウランバートルに一極集中をし、毎年人口が4万人ぐらいいっているようだ。仕事や教育のためにウランバートルで生活をする人が増えてきているらしい。そのためインフラを強化するために集合住宅を作っているようだ。JICAの支援におけるは、2013年度の日本の協力の3つの柱は、鉱業セクターの持続可能な開発とガバナンスの強化、すべての人々が恩恵を受ける成長への支援、ウランバートル都市機能強化ということだ。また、モンゴル人は仕事を5、6年で違う職種にしたり、企業を起こしたりしている人が多いようだ。

教育の面では、女子の大学進学率が高く、また、海外に留学をしている人が多いようだ。海外留学の支援をする体制もできているようだ。安全面では、夜1人での外出、午後10時以降の外出はしないこと。スリや酔っぱらいによる暴行などに気をつけるようにと注意を受けた。

林参事官から、モンゴルの経済成長の状況や日本との関係について伺った。今までに様々な国が支援を行っているが、その支援の3分の2が日本だそうだ。今後は、モンゴルは日本に民間投資をしてほしいと願っている。日本はモンゴルと良好な関係であることがわかった。また、林参事官は、モンゴルの2回の留学を経て、参事官として3回目のモンゴルである。最初の留学時のモンゴルと比べて現在のモンゴルの違いについて具体的な話を下さった。和やかな雰囲気で行うことができ、時間を忘れるくらい楽しいひと時であった。最後に、障害児教育でNPO法人を立ち上げた高橋さんを紹介して頂いた。(後日、高橋さんと会うことができ、いろいろな話を聞くことができた)

モンゴル人は、日本人にないものを持っている。豊かさだけでなく、困った人に対して温かさがある。阪神大震災、東日本大震災などの震災の復興のためにもモンゴルは支援の手を差し伸べてくれた。雄大な草原を持ち、遊牧民として生活してきた土台があるのではないだろうか。

これから始まる研修でモンゴルの良さをいろいろな場所において感じていきたいと思った。



JICAモンゴル事務所



日本大使館





## 平成25年7月30日(火)

1)記録者：今井 大介

2)訪問先：セーブ・ザ・チルドレン、新モンゴル高校

3)研修内容

●セーブ・ザ・チルドレン

子どもたちと日本遊び(剣玉、竹とんぼ等)で交流し、阿波踊り体験を実施。

●新モンゴル高校

校舎内の見学、サマースクールでの日本語授業の見学、新モンゴル高校の生徒による踊り・歌の鑑賞。

4)所感

午前中にセーブ・ザ・チルドレンを訪問した。当施設では、親の愛情を十分に受けられないウランバートル市内の子どもたち(0歳~18歳)を預かり、子どもと親の仲立ちをすること、子どもたちの生活全般の指導を行うことなどを目的としていた。当日は十数名の子どもたちがおり、「サンバエノー」と挨拶すると照れくさそうに「サンバエノー」と挨拶を返してくれた。まず、日本遊びの紹介を始めようと遊具を広げたが、小さな子どもたちは飛びつくように集まってきた。特に人気が高かったのはけん玉と竹とんぼであったように感じた。その後、阿波踊りの体験に移ったが、子どもたちも積極的に参加してくれた。日本から手ぬぐいを持参し、子どもたちに渡すと案外すんなりと頭に巻き始め、気に入ってくれているように感じた。最後に、子どもたちが中国ゴマやお手玉を披露してくれたが、高度な技に皆感嘆の声をあげていた。訪問する前は、おとなしく人見知りをする子どもたちが多いのではという先入観があったが、どの子どもたちも照れくさそうな表情は見せつつも、温かく私たちを受け入れてくれた。

午後から新モンゴル高校を訪問した。第一の感想は、「ここはモンゴルの高校か!?!」というものである。新モンゴル高校は特に親日的ということもあったが、校舎内に日本の香りが漂っていた。まずは日本語コミュニケーションの授業では、今話題のLINE(ライン)を用いた授業が日本人教師2名によって展開されていた。日本人教師はモンゴル語を使うことなく、また生徒たちも流暢な日本語で和気藹々とした雰囲気の授業であった。当研修でもっとも感動的な出来事が、女子生徒による「ハナミズキ」独唱である。当日は、日本の高校生が新モンゴル高校を訪問していたということもあり、歓迎の意味を込めた発表会が行われていた。この独唱には皆感動し、私は涙した。日本が「愛されている」と感じた瞬間であった。その後、校長先生との懇談において、新モンゴル高校の教育システムやモンゴルの教育事情などの説明を受け、「お〜」「へ〜」「なるほど」が飛び交うよい研修となった。



セーブ・ザ・チルドレン



LINEを用いた授業(新モンゴル高校)

## 平成25年7月31日(水)

1)記録者：多田 康記

2)訪問先：UNハビタット地区、大原シニアボランティア(以下SV)講義

3)研修内容

●UNハビタット地区

待機児童問題、水の供給等のインフラ整備について学んだ。

●大原SV

モンゴルの教育の現状と改善点について学んだ。

4)所感

午前中はUNハビタット地区に訪問した。この地区の問題は待機児童、インフラ整備の不足であった。まず、待機児童の問題は国連やJICA等の指導により幼稚園の建設、街灯や給水所の設置が行われた。それにより、両親が共働きの子どもが預ける事ができたり、保育士の雇用の促進であったりと問題が前進した。しかし、待機児童の数は把握出来ないほど多く、根本解決は難しいが、これにより地域住民が国の政策に興味をもったことは大きな意味を持つと感じた。次にインフラ整備である。以前は街灯すらなかったが、その当時は女性や子供が襲われる事件が多発していたようだ。しかし、街灯の整備によってそれは激減したそうである。やはり、「灯(火)をともし」というのは人にとって大事なだろうと感じた。また、給水所も地域住民の方に非常に喜ばれたようだ。これまでは、遠方まで水を汲みに行かなければならなかったがこれにより重労働から解放された。しかし、UNハビタット地区の方が市内より水道料金がいため、料金をめぐり市内とUNハビタット地区との両者間で問題が生じている。ただ、今回感慨深かったのは地区の子供たちが水を汲みにきていたことである。子どもが家庭を助けるという日本の失われたものがここにはあると感じた。

午後は大原SVにモンゴルの教育の現状を教わった。現在モンゴルの教育は改善すべきところが多い。生徒の成績の付け方、テストの作り方、授業の行い方等である。大原SVは現在、大学で教員の育成を行っている。やはり、学生達はこれまでの教育の概念があり、それを変えるのに苦労されているが、賢い民族なので成長も早いそうである。また、どの学年に何を教えるかといった国の教育の方針を決める会議も行われ、モンゴルの教育も変わりつつある。日本もより良い教育を現場の私たちが行わなければならないと改めて感じた。



給水所にて水を汲む少女(UNハビタット地区)



大原SVの講義(JICA)

## 平成25年8月1日(木)

1)記録者：越智 由佳

2)訪問先：技プロ(廃棄物処分場)、障害者親の会、淡水センター

3)研修内容

●技プロ

ウランバートル市の郊外にある日本の支援で建設されたゴミ処理場(ナランギン・エンゲル)を見学した。

●障害者親の会

市内の障害児を持つお母さん達が立ち上げたNPO組織を見学した。

●淡水センター

JICAの支援でできた環境教育のできる自然博物館を見学した。

4)所感

ゴミ処理場とは、名ばかりで、実際はただの「埋め立て場」であった。市内から集めた分別されていないゴミを、ただ広大な大地にブルドーザーを使って埋めていた。職員のイデリンさんが案内して下さった。彼は、私費で日本のゴミ処理施設を見学するくらい熱心な方で、何度も「お恥ずかしい」という趣旨のことを言っていた。急速にすすむ都市化にゴミ処理が追いついていない現状がよくわかった。しかし、イデリンさんの話から、KOICA(韓国国際協



力団)が支援した施設がきちんと稼働していないことがわかり、支援の難しさも知ることができた。ただ、ゴミ処理場にたくさんのホームレスの子どもや大人が不法に入り、廃品を取って売却してお金儲けをしていて、職員の人よりも収入がいい人もいと聞き、問題点を感じた。

モンゴルでは障害児教育に対する支援や理解が十分でなく、お母さん達が苦しい思いをされているのを感じた。外で働くことも難しく、現金収入が得られないために、ミシンを買い、デール(伝統服)や衣服の補正をしているそう。しかし、私たちが行った日も、停電のため作業ができていなかった。商品のデールもきれいに仕上がっていたため、私たちもデールを注文することにした。後日、子どもさんの1人が世界されたと聞き、ご冥福をお祈りするとともに、障害児への理解が広まるように願いたい。

淡水センターでは、素晴らしい自然がありながら環境教育が十分でなく、自然が破壊されている現状を知ることができた。FM放送ができる機械や、実験室、3カ国語の通訳ができる会議室及び、珍しい生物が展示されていた。展示物の展示の仕方や、環境教育の発信など、今後も日本が協力できることは多そうであった。



ゴミ処理場を案内して下さったイデレンさん



淡水センターにて ヤギの祖先と山羊座の君



障害児親の会

#### <ガンダン寺訪問>

たくさんの「信者」と「はと」が寺院にいた。中に入ると、赤い衣装を身にまとった僧侶が数人、中央でお経を唱えている。奥に拝殿があり、そこで拝む。神聖な場所のため写真等は禁止、緊張しながら奥へ入った。水色の布を買い、それを拝んでもらい魂をこめ、その布をお墓や記念塔に結びつける風習に興味を持った。中国のラマ教の影響を受けているようである。

#### <民族芸能ショー(馬頭琴の演奏など)>

ホテルの近くに、民族ショーを見せてくれるところがあると聞いて、みんなで行った。特に、馬頭琴演奏に興味のある参加者がいて、ぜひ、本物を聴いてみたくなった。入場前から多くの人が列をなし、開門と同時に、会場内になだれ込んだ。男女による華麗なダンス、透き通るような歌声の民謡、心地よいリズムカルな馬頭琴の演奏など、1時間あまりの時間があっという間に過ぎた。



川島隊員



民族芸能ショー

### 平成25年8月2日(金)

1)記録者：岩田 典男

2)訪問先：外傷病院(外科専門病院)訪問 ガンダン寺訪問 民族芸能ショー(馬頭琴の演奏など)

#### 3)研修内容

##### ●外傷病院(外科専門病院)訪問

病院に派遣されている隊員より、病院内を視察、そして、活動内容、モンゴルの医療事情について話を伺った。

##### ●ガンダン寺訪問

1911年創建の仏教寺院。1938年ソ連によって破壊されるが、1990年に再建。高さ26メートルの仏像などを見学。

##### ●民族芸能ショー(馬頭琴の演奏など)

モンゴルの伝統的な衣装(デール)を身につけ、民族楽器(馬頭琴など)の演奏、民謡、踊りなどモンゴルの伝統文化を堪能した。

#### 4)所感

##### <外傷病院(外科専門病院)訪問>

青年海外協力隊員の川島さんより、病院内を案内された。待合室には、たくさんの人が診察を待っている。レンガ造りの高層の病院だが、内部は配線がむき出しの照明や診察を受ける部屋も机といす、ベッドが置かれているだけである。「モンゴル唯一の外科病院です。」と聞かされ驚いた。地方にも診療所はあるが、十分な治療を受けられず、休養を目的としているようである。

川島さんは、そこで作業療法を行い、その方法を患者やその家族に広めている。十分な医療器具もそろっておらず、そこにあるものを利用して、自分たちで必要なリハビリができる器具を開発している。「ないからできない。」ではなく、そこにあるもので必要なものを生み出し、最善を尽くす隊員の工夫とたくましさを感じた。

### 平成25年8月3日(土)

1)記録者：中山 美香

2)訪問先：ウランバートル郊外ゲルスティ(1日目)

#### 3)研修内容

●5グループに分かれてゲルに滞在し、遊牧民の暮らしを体験した。

#### 4)所感

今回の研修で最も楽しみにしていたゲルスティである。9時にホテルをバスで出発し、オフロードを土ぼこりを上げながら3時間ほど走り到着した。ほぼイメージ通りの大草原、遠くにある低い山並み、そして白くて丸いゲル。近くに川があるのは予想外だった。

私の滞在したのは70歳を超える高齢の女性ツェレンさんが一人暮らしするゲルだ。今は夏休みなので、孫が2人ウランバートルからやってきていた。夏休み以外もツェレンさんの子ども10人が代わる代わるの様子を見に来てくれるそう。日本通の通訳オルギさんに「日本のここは良くないと思うところはどこか?」と尋ねた際に、「年老いた親を老人ホームに入れるところ。」という答えが返ってきたことを思い出す。モンゴルでは親や高齢者をいたわり大切にするのだ。

土足にためらいつつ勧められるままゲルに入るとすぐにスーテーチャイ(塩ミルクティー)と手作りの菓子でもてなしてくれる。おそろおそろいただく、なかなかの美味。朝大量に作っておいてくれたボールツォグ(揚げパン)にウルム(手作りバター)を付けて食べると柔らかくておいしい。昼食のゴイモンティスープ(干し牛肉と野菜とマカロニの入ったスープ)、夕食のスーテーブタ(ミルク粥)もおいしく、食事はゲル滞在のよい思い出のひとつとなった。

遊牧民は肉ばかり食べているのかと思っていたがそうではなく、小さく刻んだ干し肉が少量入っているだけであった。考えてみれば当然で、大切な家畜を頻繁に殺して食べることはできるはずもない。人と動物がともに生き、生活しており、よく「無駄のない暮らし」と表現されるが、本当にそうであった。朝夕しぼった乳を、いろいろな物に加工し、食の中心としていた。家畜の糞を燃料にしており、食器を洗った水は番犬が飲んでた。手伝いの孫も含めて家族に役割分担があり、協力してよく働く。

乗馬や乳搾りを体験し、シミアルヒ(ヨーグルトから作った蒸留酒)をいただき、孫たちとランプを楽しみ、夜が更



けていった。薄曇りのため満天の星空とはいかなかったが、天の川や流れ星を見ることができた。夜中の草原トレの際、番犬が付いてくるのでお尻をかまれるかと怯えたが、なんと彼も私の隣でおしっこをしはじめ、不思議な連帯感を感じうれしくなった。



アーロールを作るツェレンさん



かまど



モンゴルの大草原

## 平成25年8月4日(日)

1)記録者：村上 敦

2)訪問先：ウランバートル郊外ゲルスティ(2日目)

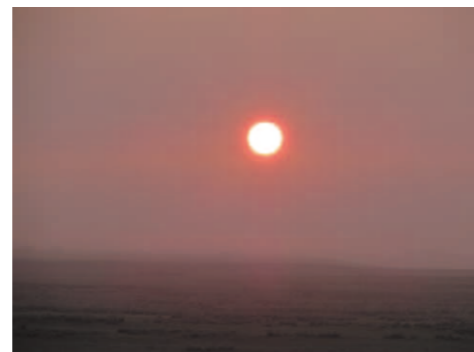
3)研修内容

- 各ゲルスティ先で、昼食まで活動を行う。

4)所感

最初、初めてのゲルスティに期待半分、不安半分であったが、案ずるより産むが易しのとおり、やってみたらなんとかなるものであった。無為な時を、ほ〜と過ごす極楽を感じた。

ステイ先	宿 泊 者		通 訊
ゲリレイ	村 上	多 田	オリギル
ツェレン	中 山	松 井	ニンジン
オチョル	岩 田	大 澤	スーホー
ボール	越 智	西 岡	アニス
メ ガ	松 本	今 井	ジャガ



朝日



シミン・アルヒ(ヨーグルトの蒸留酒)製造見学



ゲリレイさんのゲルにて



ツェレンさんのゲルにて

## 平成25年8月5日(月)

1)記録者：松本 賢一

2)訪問先：テレルジ子どもキャンプ、教材探索(ノミンデパート)

3)研修内容

- テレルジ子どもキャンプ訪問

4)所感

テレルジ自然公園にあるテレルジ子どもキャンプに行くためにいつもより早くホテルを出発した。理由は普通2時間で到着するのだが、ここ最近工事が行われているので、30分ほど余計かかると言うこと。モンゴルでは、冬は積雪や極度に低い気温のため、建設や道路工事が行われなため、良い季節に一気に工事をやってしまうそうである。バスで、1時間弱走ると草原の中を走るハイウェイ(らしきもの)を走り、やがて舗装されていない道をどんどん走る。小さな山を越えると、突然緑と岩山と大きな川が流れる美しい景色が眼前に現れた。テレルジ自然公園である。入り口でバスが停まり一人3,000トゥグルク(日本円で約200円)を支払う。入場料とのことであった。その後1時間弱走ると、山の麓に転々とカラフルな木造の建物と屋外にバスケットコートやバレーコート、ステージがたたずんでいた。テレルジ子どもキャンプに到着である。

テレルジ子どもキャンプは1985年に建設され、同時に200~300人の児童・生徒達が利用できる、日本で言うところの「野外活動センター」や「青年(少年自然)の家」のようなものである。ただ、日本とは若干利用形態が異なっており、毎年夏休みに希望者を対象として一週間ずつの“子どもキャンプ”が開かれる。はじめの3期が小学生対象、次の2期が中学生、その次の3期は高校生や大学生、そして最後の1週はそれまでの各週で優秀だった3名ずつが招待されてキャンプ(リーダー研修のようなもの)を行うのだそうだ。費用は一週間一人あたり135,000トゥグルク(日本円で約12,000円)であり、児童・生徒や保護者が同じような施設がたくさんある中から、青年センター(都市にある)での紹介やテレビ番組での紹介を見て、学校を通して申し込むのだそうだ。指導に当たる職員は現職の教員で、当施設では40人の教職員達が夏休みを利用して常駐している。ここで1週間の生活を通して、自然の大切さや、ファッションショーやスポーツ、自然とのふれあいを通して、仲間との絆や自己表現力を育てることに力を入れている。この1週間は教科の学習は行わない。このようなシステムだと、人気の高い施設にはたくさんの児童・生徒達が集まるそうで、当施設は多くの生徒を集めることで賞をいただいたそうだ。9週目(優秀な生徒が参加できる最後のリーダー研修のようなもの)では、有名な歌手やスポーツ選手も招いているそうだ。

施設や運営についてのお話を聞いた後、寮の一つを訪れ文化交流を行った。各寮が最大男女混合の40人で構成されいわゆるクラスのようにしており、各寮に担任がいて寝食を共にしている。その寮でも男女合わせて約40人の生徒達が生活をしており、訪れたときには、ファッションショーの準備まっただ中であった。

文化交流が始まりはじめは少し恥ずかしそうだった生徒達も、一緒に阿波踊りを踊ったり、日本から持って行った、折り紙、けん玉、シャボン玉、竹とんぼなどの日本の昔遊びに、一緒に取り組んでいく内に打ち解けてくるのが分かった。中には、日本語を勉強中の大学生も混じっており、積極的に日本語で交流をしようとしていた。お別れの時には、生徒達が心一つにして、歓迎の歌を歌ってくれた。言葉は分からなくても、気持ちは伝わるもの。モンゴル研修も終盤を迎えて、嬉しいような寂しいような気持ちを覚えた。



テレルジ公園内 馬でヤクを追う



交流:折り紙が人気



亀石見学

平成25年8月6日(火)

1)記録者：松井 智恵

2)訪問先

JICAモンゴル事務所、モンゴル国立博物館、 自由行動(馬頭琴工房など)

3)研修内容

- JICAモンゴル事務所：これまでの研修の振り返りを行った。
- モンゴル国立博物館：博物館の視察。
- 馬頭琴工房：馬頭琴工房の見学。

4)所感

11日間の研修の振り返りを行った。リーダーの松本先生が代表で挨拶を行った後、参加教員一人ずつこの研修で感じたことを発表した。モンゴルの実情、日本との関係、ゲルステイの体験、出会いの素晴らしさなど様々な感想があった。それぞれの視点から感じたモンゴル研修。そして、加藤所長からは、この経験を日本に帰った後、子どもたちに海外へ目を向ける機会を与えてほしい。また、新モンゴル高校との交流や淡水センターのTV会議なども希望があればJICA四国と繋げて行うことができるということを知った。

あつという間の11日間であった。それぞれ感じた思いを大切に、これからは実践に生かしていきたいと思う。これからがスタートである。そして、グローバルな視点を持って行動できる子どもたちを育てていきたい。

モンゴル国立博物館では、古代、チンギスハーンの時代から社会主義時代、そして民主国家モンゴルの歴史と文化に触れることができた。民族衣装デールや装飾品なども展示されていた。

通訳のオリギルさんのはからいにより、馬頭琴工房へ見学に行くことができた。馬頭琴の名人に指導を受けている16歳の少年に出会った。馬頭琴の演奏を聞かせてもらったり、実際に馬頭琴に触れてみたりすることができた。馬頭琴に挑戦。意外にすんなりと音が出て驚いた。自由に演奏ができたなら気持ちがいいだろうと思った。

研修の最後の夜は、お世話になった方々と夕食を共にすることができた。これまでの研修を振り返りながら、話をする事ができた。

たくさんの感動があり、また、素敵な出会いがあった。この出会いを大切に、今後も繋げていきたいと思う。

この研修で、様々な経験を行うことができた。そして、思い出と一緒に、教材や日本へのお土産などもたくさんスーツケースに詰めた。そのため、ウランバートル空港のチェックインでは、重量オーバーになった人も・・・。スーツケースを広げて、詰め直して無事に事なきを得た。最後の最後で汗をかいてしまったけれど、これも思い出のひとつである。

バヤルタイ(モンゴル語でさようなら)



研修の振り返り



国立博物館：歴史と文化に触れて感動!



16歳の少年の馬頭琴の演奏



最後の夜：お世話になった方々と

### 参加者氏名

名前	県名	所属学校名
松本 賢一	徳島	吉野川市立川島中学校
松井 智恵	高知	南国市立国府小学校
今井 大介	愛媛	私立帝京第五高等学校
越智 由佳	愛媛	愛媛県立北条高等学校
多田 康記	香川	香川県立笠田高等学校
岩田 典男	香川	三豊市立比地小学校
中山 美香	香川	香川県立香川丸亀養護学校
村上 敦	香川	香川県立三本松高等学校

※敬称略

### 同行者氏名

名前	県名	所属学校名
西岡 美紀	香川	香川県国際協力推進員

※敬称略

### 同行者よりメッセージ

サインバエノー！(モンゴル語でこんにちは)この夏、同行者として四国4県から集まった8名の先生たちと期待と不安に胸をふくらませモンゴルの地を訪れました。

すみきった青空と、どこまでも続く草原に点在するゲル。そこには大自然の中でたくましく暮らす人々と強い家族の絆がありました。その一方で、高層ビルが立ち並ぶ首都ウランバートルがあり、急速な近代化によって生じた、地方の過疎化や公共サービスの低下、環境汚染等、様々な課題があることを知りました。また、そういった中で、現地で活躍する日本人の人たちの熱い思いにも触れることも出来ました。

先生たちは、初めての慣れない土地で不安や疲れもあったと思いますが、子ども達を見れば笑顔になり、一緒に目をきらきらさせ交流している姿はとても印象的でした。また、熱心に教材収集を行い写真を撮る姿からは、自分の生徒さん達のために、少しでも多くのことを学びとり、持ち帰りたいという熱い思いを感じました。帰国してからは、その溢れる思いを形にし、実践授業を行って頂きましたが、今後も引き続き、モンゴルでの沢山の出会いや学びをもっと多くの生徒さん達に伝えて頂きたいと心から思っています。先生方の益々のご活躍を応援しています。

この研修での一つ一つの素敵な出会いに感謝を込めて。

香川県国際協力推進員 西岡 美紀

